三河アララギ

２０２４年 令和６年９月 長月（ながつき）

九　月　号

第 七十一 巻　第 九 号

ニューヨーク日記（215）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

MANGO FESTIVAL
Blue Shoe Diaries

みんなマンゴ好きだよね、私もその内の1人でマイアミで毎年恒例のマンゴフェスティバルがあるのを聞いて早速行ってきました。チケットと一緒にマンゴスムージー又はマンゴカクテルが買えるんだけど私はマンゴ感を薄めたくないのでスムージーにしました。とってもマンゴで美味しかった。それから100種類のマンゴが展示されてるのが見れ、（レクチャーなどもあるみたい）お勉強もできます。実食もできるけどそれは4種類のみ。一つ一つ全然味が違って面白かったです。そこから袋に詰め放題で好きなマンゴが買えるようになってました。マンゴの木なんかも買えちゃいます。この日は暑すぎて長くは居れなかったけれどなかなか面白いイベントでした。前もって予約すればレストランでフルコースのマンゴ料理が食べれるんだって。来年行ってみるかな？

Everyone loves mangoes. I am one of those people, so when I heard there is an annual mango festival in Miami, I had to go check it out. With your ticket, you can get a mango smoothie or a mango cocktail. I didn't want to dilute any of the mangoness, so I opted for the smoothie. It was delicious. Then, you get to see 100 different varieties of mangoes on display (and a lecture if you want to learn more). There's the mango tasting, but you only taste four varieties, and you can buy a bagful (as much as you can fit in the bag) of your favorite. There are mango trees for purchase as well. Separately, you can reserve a mango tasting menu, but it was sold out when I purchased my ticket. Maybe next year! All in all, it was a fun event, but on a sweltering HOT day, so I didn't last very long.

目次

第七十一巻第九号（通巻八四九号）

表紙・アンデスの染織（1）
ニューヨーク日記(215) Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々」　今泉　米子（5）
三河アララギ歌集Ⅴ　大須賀寿恵（6）
三河アララギ歌集Ⅴ　夏目　勝弘（7）
『歌集　八千代』　岡本八千代（8）
三河アララギ歌集Ⅵ　弓谷　久子（10）
エッフェル塔　今泉　由利（12）
新玉葱　安藤　和代（14）
梅雨明け　山口千惠子（16）
事も無し　杉浦恵美子（18）
暑い、熱い！　伊藤　忠男（20）
庭中改修（その六）　白井　信昭（22）
鳴き出せば　矢崎　直人（24）
ペンを持つ　清澤　範子（26）
『ことよせ』　いーはとぶ　鈴木美耶子（28）
牧原　正枝（28）
森　厚子（29）
水野　絹子（29）
牧原　規惠（30）
稲吉　友江（30）
大武　智子（31）
現代学生百人一首　東洋大学
村上　翔太（32）
黒木　薫里（32）
小室　華凛（32）
武藤　太一（32）
宮本　和奏（33）
大川　楓（33）
冨田　涼太（33）
武田　衣未（33）
植村　公女（34）
木村　歩歩（34）
今泉　如雲（34）
矢崎　直人（35）
今泉　由利（35）
『俳句』
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（36）
折々の詩（七）　ふじのけんじ（38）
五感を澄ませば(27)　杉浦恵美子（40）
附録（二十七）　矢崎　直人（42）
『秋の気配』　中屋　保之（44）
『酔いの徒然』（149）　丸山酔宵子（46）
「エイジレスアイランドの歌」　高橋　育郎（48）
絹の話（166）　今泉　雅勝（50）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（52）
初狩便り34　花野みぷり（54）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（56）
康鍼治療院　玄　翁（58）
蝸牛　殿山　木風（60）
編集室だより　今泉　由利（62）
「三河アララギ」について（64）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

風なくてそよぐは雨の來るけはひ竹四五本のはら竹の葉

七十一年の前に苦しみ死にし子規その年われは生れしといふ

夢の中に幾度か死にて薄明に眼覚むるわれのいのちひとつあり

不死身かとおもふばかりに生き耐へて極まる日までうたひつづけき

醫師會史のための資料をつづりゆく父とわれとの二代のあそび

よろこびにさへ疲れて熱を病む老いて弱ればよろこびにさへ

三萬日といへどもつひに長からず残るこの日を梨返り笑く

残りすくなき日をまた病みて焦りつつ手の指深く組み合はせゐる

椋鳥の一群はやくすぎし空窓より見たり臥床（ふしど）にかへる

熱にねむりひるのねむりは夜るにつづき幻にたつ何ものもなし

歌集「草々」

今泉米子

思はぬにつれだち來り島山に車を降りてあしたばを拔く

わが庭の羊齒のたぐひと同じにて靑つやつやし自然公園

網棚にわがあしたばの葉を垂れて伊豆大島の旅のをはりぬ

畝たてず蒔かれし麥の靑萌えのなびける畑も蒲生野にして

蒲生野のみ狩のあとと野づかさの船岡山を雲のかげ過ぐ

冬苔に草履すべりてめぐる岡一人逢ひたるは雉をさげたり

人聲の方に楮（しもと）を分けてゆく巖に遊ぶは少年二人

乘換のホームの日當りに出でて待つ前一輛と云ふ信樂行を

一輛となりて岐れて來し電車風花の舞ふ信樂に果つ

そこここに上り窯見えつつ信樂の陶燒くらしき煙のあがらず

三河アララギ歌集Ⅴ

大須賀寿恵

蒼く澄みて透れる今朝の大空を翔びゆくもののなきはよろしも

縁どりてきらきらと今朝の霜白しほとけのざまたはこべらの上

今日一日おだやかならむと思ひつつ一人歩めり霜厚き朝

さわがしきまでに囀る声のしてきさらぎ雲雀は枯草の中

何といふことあらねどもタベ早く飯を終へつつ心足りゐる

松の緑すくすく伸び立つ春の日の今日より成は中学一年生

またひとつ殖えたる右手の老斑に沁々としてクリームを塗る

疼痛に耐へて生きゆくも意義ありと悲しみながらのこの三十年

一人静の花にかがみて相共に心の内は言ひ出さずをり

移り棲みて十三年なり東を西をいまだあやまつわが日々にして

三河アララギ歌集Ⅴ

夏目勝弘

九十年生きて逝きたる叔父の顔食を助けられし日々をぞ思ふ

定期券を収めたる尻のポケットを手に確かめて雨の中に出づ

歯に罹る小さきを取らむその事に悔しき事も忘れてゐたり

太陽の下を一日歩みたり幾年ぶりかと思ひなどして

土を被る竹の子掘りて幾日ぞ今朝は枝の出でたる竹の子を折る

竹の子は早くも枝を出だしをり枝にも小さき竹の皮付けて

筆談もて貯金勧奨することも我の仕事と思へば淋し

よろしくお願ひしますと日に幾度いはねばならぬ仕事の続く

定年の早く来ぬかと思ふあり子規の生涯知りたる時より

朝出でて夜に帰る繰り返しわれの一生の淋しきリズム

『歌集　八千代』

蒲郡　岡本八千代

別れ際にわれに握手をまた求む丸井よぶさんは黄に病める手に

細き手をわれにさしのべ君は賜ふ白ポプリンの割烹着一着

よぶさんの臥しゐし家をすれすれに三河線電車にて今日通りたり

朝顔の花二つ咲けとの願ひ足りて君はその日に逝きてしまひぬ

白ポプリンの割烹着われに賜ひたる礼状も出さずよぶさんは亡し

渚見ゆるわが学校の浩気台に紅山茶花の咲き始めたり

紅のさざんくわ咲きしを言ひ出して今日の国語授業始めんとする

貧血の我を支へて運びゆく君らの声のおぼろげに聞こゆ

前歯一本抜けたるままに授業する「ますましませましょ」漏れてゆきつつ

仕舞ひおきし職員室のストーブを私が今年も持ち出してくる

冬休みになりたる今朝はおとろへし八つ手の花の白きを見てをり

伊勢志摩への職員旅行に行かずしてひとり日直のわが茶をわかす

亡くなりしよぶさんがくれし割烹着を寒明けし今宵よりおろしたり

卒業の記念樹を植うる時の来て根をつつまれし裸木三本

脊髄注射効きすぎしごとく手術して五日目の今朝は両手しびれる

三河アララギ歌集Ⅵ　日照雨

豊川　弓谷　久子

束の間を日照雨の止みて地上より空に立ちたり初冬の虹

今朝走るオリエント急行見むとして芒の土手に立ちて待ちをり

陳列台の上に飾りぬ銀色のハイヒール胸に編み込みしセーター

舞ひ落つる枯葉の如く蝶の来て我が干す蒲団に翅休めたり

鰻など買はむと師走の町に出づ夫が戴きたる義援金もちて

廃船の傾きて砂に埋もれたり西方浜には人誰も居ず

カリカリと夫の手に今日音立つる最上川よりの胡桃の実二つ

もの蔭に雪残る日に万作の花の枝持つ人に逢ひたり

足弱く病みゐませるかホトトギス冬ざれてなほ咲き続く庭

田に沿へる用水路ここより曲りゐて一きは高しせせらぎの音

貝津丸山の我の畠は茅花の穂白き炎の如く風に靡ける

洗濯機停めたる余韻の絶ゆるまで流れる白き雲を見てをり

背のびして伸びたつ梅の枝を切る梅雨の晴間の空は明るし

柿の実のころがる路地は風の道老い猫一匹眠りてをりぬ

我が掌より幼なの小さき掌の上に移したり蛍の青き光を

エッフェル塔

東京　今泉由利

生きゆけるリズムに短歌のリズムを添えてこのままこのまま

人として自然のままのそけままに安らかにをり穏やかに過ぐ

勝ち負けの時限にをりしことはない自身の好みのそのままに

お父さんお母さん共に過せし日々のまま私の基礎の確かなるべし

直毛の私の髪にほんのりとまろみをつけて下さる美容師

満員御礼の垂れ幕のもと集ひたる人々多くありてなりたつ

皆んな皆負けないようにと見てをりぬ力士（すもう）の世界に勝負あり

勝つために大き姿になりたることを相撲を描かむ目論見もてり

みんなみな負けないようにと見てをりぬ力士の世界に勝負あり

勝つために太く大きくなりたるを相撲を描かむもくろみはたさず

あのこともこのことも心の内に隅田川花火大会生中継中

遠花火近くの花火一つ画面に皆治まりぬこの大ひなる空間

フランスにエッフェルさんのをられしを今しみじみとエッフェル塔

右側と左側と全体側と支え合ひつつバランス整ふエッフェル塔

どの角度の景色の中にもエッフェル塔美しくあり頼もしくあり

新玉葱

豊川　安藤和代

朝未き窓に青草香りきて大きく小さく草刈機の音

枇杷熟れて喜びし孫子も遠く住み今朝もひよ鳥狙いていたり

露草の紫深く輝けばいよいよ夏も本番となる

梅漬けのラベルの文字もなつかしく嫁逝きて早十五年過ぐ

日々稲は水面をうめて成長す豊作願う空は瑠璃色

現代短歌などは詠めねどゆく雲と庭の草花に心寄せゆく

「狐の嫁入り」聞き大泣きの幼な日を思い出させて今日照雨

祇園祭鎮守の森も華やげり翻めく幟の音ひびきくる

肥えづきし青田に一羽白鷺の午前の時を動ぜずにおり

会話なく買い物出来る今の世に駄葉子屋小母ちゃん笑顔のうかぶ

今日咲くか明日は開くか朝顔を目玉くるりと蟷螂も待つ

朝もよしタも又よしお味噌汁新玉葱に〝おかわり〟を言う

文月は母の命日母を詠み梔子詠みてもう幾年ぞ

母逝きて思えば長し五十年思い出させて香る梔子

夜の田の蛙の合唱子守り歌今宵楽しき夢など見らん

梅雨明け

豊川　山口千惠子

薄日射す梅雨の晴れ間の舗装路に痩せやせし猫寝そべりてをり

雨上がりの露地に寝そべる痩せし猫わが足音に素早く逃げゆく

楊梅の円実ころころ散れる道今朝は側に掃き寄せられて

日々青さ増しゆく植田眺めつつのろき歩みの夫と連れ立つ

仕掛けたるゴキブリダンゴに当たりたる大きゴキブリ腹見せうごめく

老二人に熱中症を心配し掛けくる電話少しうるさし

遅れ来し今年の梅雨の雨続く伸び放題の庭の草々

厨の窓開ければ高き蝉の声久しく無人の隣家の庭に

クーラーをかけて一日家こもる今日のテレビに梅雨明け報ずる

炎天の庭に続ける蟻の列たどり行きたり幼かりしわれ

側溝の水さらさらと流れゐる日中の暑さ残る道行く

漬けし梅笊に広げて土用干しほのかにただよう紫蘇の香

開け放す部屋に涼しき風通る父母いませしふるさとの家

手押しポンプに汲みし井戸水冷めたかり西瓜浸しゐし祖母のなつかし

冷えし西瓜むさぼる如く食ひしかな月日過ぎゆく夏の日々逝く

事も無し

蒲郡　杉浦恵美子

喘息の予防の薬のパッケージ一回毎に表示減り行く

喘息の薬の表示今朝ゼロぞつまり明日からまたひと月か

人生も殆どこんなルーティン持病ありてもまあ事も無し

この先に何があるかは知らねども事も無しのみ強く願はる

上野三碑遠くて容易に訪ね得ず旅行リストに長年挙げてた

上野三碑巡るに乗るは上信電鉄そうか此処らは信州なのか

上信電鉄今どき切符に入鋏の単線忽ち旅心湧く

多胡の碑を四方の窓より観察す直に触れ得ず念願なれど

上野の多胡碑帰化人関はれり千三百年昔の此の地

いにしへの大和の国の辺地をば支へし帰化人覇気如何ばかり

名も知らぬ多くの帰化人黎明期のわが国導く肝に銘ずべし

山上碑母刀自供養の石面に出自の誇り感じられたり

金井沢碑価値が分からぬその昔洗濯板に使用せしとか

我が三碑訪ねし間の数時間誰にも逢はず集落鎮もる

炎天下自販機探せど上野三碑何処にもないのはいっそ爽快

暑い、熱い！

大阪　伊藤忠男

売れ残る蚊取り線香山積みに夏の異変は序の口なるや

打ち水に行水花火スイカ割り夏は楽しきものなるに

涼やかな夕立望む３時過ぎ灼熱豪雨繰り返すなり

浴衣着て団扇片手に路地歩くマドンナ昔憧れの的

日の光容赦なきかな照り返す朝の気温は30度超え

懐かしいや縁台将棋に風鈴も今はむかしの思い出なるや

外出はペットボトルを右手持ち角行くごとにキャップをはずす

マスクして階段上り汗を拭く息も絶え絶えこの夏の夏

灼熱の日差しを受けて色褪せる辺り一面白くなりけり

道路脇命尽きたか蝉死骸そっと手に取り土に埋めたり

コンクリの壁に挟まれ街路樹の垂れた小枝も息絶え絶えか

蝉とてもたまらぬ夏かこの頃の鳴き声薄れ囁きになる

朝日受け西に傾く丸い月その陰徐々に薄くなりけり

立秋と言われ始めて秋を知る季節は変わるものなるや

奥出雲朝起き空にウロコ雲秋の気配かわが目疑う

庭中改修（その六）

豊川　白井　信昭

明け方の家近くして養魚場シャッター開く音フォークリスト鳴る

みどり田の早苗さやけし裏道の農用水路さらさらさら

夜な夜な裏田より聞く蛙らの大合唱は水音かき消す

一夜（ひとよ）さを網戸開け放す前後（まえうしろ）ふき通るこの朝明涼しき

隙間より腐葉土流れ出ぬ様に下地に仕切るベニヤ板と石

養生の腐葉土土と混ぜ合はす土のう袋二つわがスコップ持て

打ち剥がし三段ブロック今にして使うあてなく片付け終へり

夏至よりは十一日すぎ半夏生家族と食す蛸入り刺し身

隣り合う花壇の間狭くして水道栓と量水器あり

角口の水道ホース生垣に飛沫の散布奥まで届く

口元にまず支柱一本縦横（たてよこ）の起点に据えてブロックに塞ぐ

立ち上げる高さ九〇センチ支柱二台豆板二段二メートルほど

曲がり箇所下地固めて立ち上げる支柱一本ここ結接点

梅雨明けて降り注ぐごと蝉時雨水音かき消す熊蟬ならむ

入出口花壇の囲まとまりて腐葉土と土混ぜて満たせり

鳴き出せば

埼玉　矢崎直人

知ってるを分かっているを疑えるそこに光が差し込むように

点と点結ぶソーシャルワークかな点から線へ線から面へ

足らずともいまの自分にできることいまの自分にせまりてゆける

秋暑き夕方六時駅前のカラクリ時計の人形踊る

新紙幣財布の中に舞い込めばしばし留めてみたくなりけり

日本と世界のズレの原爆の落とされた土地ヒロシマナガサキ

カーテンが変り気分も変わりゆく強い日差しに遮光のカーテン

尾を垂れしそのまま道を走る猫その猫の尾に暑さを感じ

鳴き出せばいつまで続く鳴き続くつくつくぼうしつくつくぼうし

蝉時雨街に古びし屋敷跡崩れかかるも杜の中なる

考え得る最悪の事態を想定し打てるだけ手を打てる防災

ペンを持つ

春日井　清　澤　範　子

老人ホームボンボリ桜花の生花いけて春の足音近づきて来ぬ

陽光の良く当る窓開き春の風は通り過ぎゆく

老人ホームの雰囲気にもなれオシボリの花に巻くは楽しき仕事

今朝もまたおしぼりを作るなり少し細めに力を入れて

今日はホーム入浴の日老の体のゆったりつかる

入所せし老人ホームにてペンを持つ三河アララギを気持ちよく書く

ホームの朝の食事の前にラジオ体操をして心身をきたえる

吾の足むくみをりて今日も又足やや高くして安らかなねむり

コーンポートにいけたる花はカーネーション色よくいけて水一杯に張る

六月も陽気明るく過ぎにけり老人ホームのルームスポット

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

手の平にすつぽり収まるこの四Ｂ鉛筆立てにまた戻しやる

キャップ二つ繋ぎて四Ｂ使ひゐるあと何文字か書かむと思ふ

削り器にはもう挟みきれぬ四Ｂのこの小さきにもはやさやうなら

鈴木美耶子

かつて八千代先生に勧められ四Ｂの鉛筆を使い始めもう何年にか。変わらず歌作りには四Ｂを愛用しています。

通学路見ながら草を取り始む中学生から挨拶うける

小学生はきちんと並び登校す「今日は暑いよ」「プールはまだだよ！」

朝の畑西浦の子等と「おはよう」と栄養剤のごと飲みこむ言葉

牧原正枝

夏にはきつい草取りも朝の登校時に子供達と「おはよう」を言いあいながら楽しいひとときになりました。

ほらそこにあそこに紫陽花咲きゐると母姉たちと車中にぎやか　　森　厚子

咲く花に触れむと母の伸べる手はいつもきまつて青き紫陽花

半島の根元辺りと吾が家を母に伝へる三ヶ根山にて

母と姉妹そろって紫陽花咲く三ヶ根山をドライブしました。吾が町西浦半島がジオラマのようでした。

縦横に走る高速宙（そら）をゆく地上の息吹に触れもせずゆく　　水野絹子

蓮台を飲み込む石垣触れてみるこの緑深き明智の城の

月山（がつさん）の草木のさらめき尼子の兵（へい）の声音にも似て我らを包む

丹後篠山の光秀の城は、石垣に相当数の蓮台が転用されていました。尼子氏にしろ、敗者の哀しみが迫ってきます。

近頃の野菜の高値目にするもわが畑のものまだ未熟なり

生活になくてはならぬ車なり更新の度悩めるわれら

梅雨時の再びの芽ぶきあざやかなり見わたす限りみどりみどりよ

城山の祭りが近づきお役の草取りが雨で二週間延期に。皆の祈りが通じたか晴れて間に合い綺麗になりました。

牧原規惠

太極拳休みて二年たちにけり会ふ人々の懐かしきかな

売却の看板立ちたる広き土地雑草の中月見草一輪

ドドドンと大皿に盛る初鰹今日は父の日孫子ら揃ふ

町を歩いていても空家、空地が多く我が家も近い将来そうなる運命。これからの課題になる事でしょう

稲吉友江

安城の七夕祭り三度目の今夜は孫の手を引きて見る

動かせばこきりと鳴る首わが持ちて寂しき音ををりをりに聴く

毀たれし駅前のビル更地には戦車のやうなキャタピラー車並ぶ

一度目は三歳の頃、ひとり身だった叔父と。二度目は職場の同僚と。売れ残ることに怯えていました。

大武智子

※八月号の森 厚子様の第一首目が間違って掲載してしまいました。
正しくはこちらになります。大変申し訳ございませんでした。

またしても線状降水帯の只中か雨音さらに激しくなりぬ

現代学生百人一首

東洋大学

体育館カンカンキュッキュッと鳴り響くシューズとボールのすてきな音色

福島県立平工業高等学校1年　村上　翔太

リモートで授業はじまり映る部屋勉強よりもそうじ頑張る

茨城県立鉾田第一高等学校1年　黒木　薫里

顔加工男に変身してみたら「パパにそっくり！」ショックな私

茨城高等学校1年　小室　華凛

くだらないそれが将来何になる鼻で笑って憧れる僕

茨城高等学校1年　武藤　太一

相葉くん櫻井くんも祝結婚私も一応一般女性

茨城高等学校２年　**宮本　和奏**

発表中私の声が遅れてる私は困惑画面は爆笑

鹿嶋市立平井中学校３年　**大川　楓**

賢さをスマートフォンに奪われる操作されてる君の日常

東洋大学附属牛久高等学校３年　**冨田　涼太**

ピカピカに磨いたフルート出番なく涙にぬれたコロナ禍の夏

埼玉県立川越女子高等学校１年　**武田　衣未**

『俳句』

炎昼やゆらぎもせずの立話
落ち蝉を踏みてひと月憂ひかな
小判草畳のくらし好みけり

植村公女

嬉しさやラムネが冷えて友がいて
呻りつつ日除け欲しがる室外機
素数蝉米大統領誰を推す
年老いてキリコのマヌカン汗まみれ
ガンダーラ小暑大暑も酷暑かな

木村歩歩

八戸の朝の早さや夏の潮
穀田てふ名の船長や蝉時雨
三伏や月山という銘の刀

今泉如雲

秋暑しカラクリ人形踊りだす
新紙幣財布に来たり秋立つ日
新しきカーテンの色秋立つ日
秋暑し尾を垂れしまま走る猫
いつまでも続くつくつくぼうしかな

矢崎直人

音無しく空気ゆるがぬ夏最中
光あり空気もあり夏休み
地球上の生物種にして夏生れ
太陽系第３惑星夏地球
ユリ科にて山百合は咲く草深々
入道雲わきいだしたり水平線
さりげなく月見草の咲き初むる

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

円月に雲流れゆき梅雨の前　　木風

重荷負い野宿もするかかたつむり

今の世は生きにくかろうかたつむり

梅雨に入り想い出となり蝸牛

春たより孫の成長漢字文　　雄山

予定なし梅雨の最中の日曜日

大相撲若手が伸びた夏の場所

時を経てますます上がるブランド品

夏みかんたわわに色づき隣庭　　つね子

更衣替え今年は淋しい一人ぼち
大小の噴水上り子等はしゃぐ
文字摺の小花のピンク左まき

白シャツの子供の手先ハンディ（せんぷうき）フアン
猛暑日に負けるなせみの声たかし
夏本番暑さのりきるうなぎかな

恵風

墓参りお国なまりが懐しい

紀山

秋時雨金色あとに月見坂

中野さと美

見渡せば待ち焦がれいし百千鳥

金子

折々の詩（七）

ふじの　けんじ

詩を書く

何だろう　何か切なくなる
生きていることが　ここにいることが
たまらなくいとおしい
なぜいのちはここにあるのか
を　考えてしまう

ときどき叫びたくなる
人間はなんて脆く
醜く　かつ美しいのか
その尊さを見つめる

そういった時が
詩への扉
言葉が湧きだす
枯れない泉のように
自分の中からあふれ出る

なぜ詩を書くのか
今だからはっきり言える

言葉と生きるために
全存在とともに
詩を書く

五感を澄ませば（27）

杉浦恵美子

東京へ

最近この地方のテレビで毎日のように見かける若い女子アナが、突然結婚の報告。

彼女は東京出身なので寿退社かと思いきや「引き続き大好きな東海地方でより一層成長できるよう真摯に日々の放送に向き合ってまいります。」とのコメント。

嬉しくてすぐ応援メッセージを送りました。

と言うのも、これまで多くの地方局の女子アナの、新人から次第に上手くなって行く様子を微笑ましく見守っていると、何年もしないうちに突然結婚のため退社、殆どの方が帰京。

親しみをもぎ取られたようで、幾度も淋しい思いをしたものです。

彼女達にもこの選択に悩みもあったかも知れませんが、最終的には希望を持って巣立って行かれたことでしょう。

でも、地方に暮らす私たちには

「ああこの人も東京に吸い込まれて行った」

という感覚。

そこで思い出すのはこんな古い歌謡曲。

「夕焼け空が　マッカッカ

とんびがくるりと　輪を描いた

そこから東京が　見えるかい（以下略）」

これは昭和33年発表・歌手三橋美智也『夕焼けとんび』の冒頭。改めて歌詞を見ると地方から東京へ飛び出して行った兄の身の上を案ずる内容。

幼い頃、この曲を聴く度に、空高く旋回するとんびなら行ったことのない東京が見えるのかと、憧れをかき立てられたものでした。

もう一曲。

「（前略）

何も思わずに電車に飛び乗り

君の東京へ東京へと出かけました

いつもいつでも夢と希望をもって

君は東京で生きていました

東京へはもう何度も行きましたね
君の住む美し都
東京へはもう何度も行きましたね
君が咲く花の都　（以下略）」

マイ・ペース『東京』昭和49年

軽快な曲調ながら哀愁のあるフォークソングです。リフレーンが歌い易く知らず知らず口ずさんでしまいます。

ネット検索したらこの曲へのコメントが沢山。

「田舎者にとっては名曲中の名曲ですね。」

「16才で東京に就職しました。挫折して青森に戻り・・・夜行列車で泣きながら帰ったのを覚えています。今でもこの曲を聴くと涙が出ます。」

「大学で東京に出てきました。実家に帰る新幹線では、必ず上京した時の不安な気持ちを思い出します。」

「東京での単身赴任　戻ってこの曲を聴くと心に刺さります」

これらのコメントに共通しているのは、東京とそれ以外の地方という明確なふたつの区別。

そしてこの曲に思い入れがあるのは、東京以外の出身者でしょう。つまり昔も今も地方に暮らす者は、東京に対して憧れや引目など複雑な気持ちを抱いているのかもしれません。

東京の方から「田舎は何処？」と聞かれたことがあります。田舎＝故郷の意味で言われたのに「どうせ私は田舎者ですよ」と内心傷ついた覚えがあります。

東京から地方へ来た方がまた東京に戻るのを見送る淋しさはそんな複雑な心境から来ているのかもしれません。

ところで、「東京へ」の格助詞「**へ**」は「**に**」とも置き換えることができます。でもニュアンスが異なってきます。「に」は到達点「東京そのもの」を示し、「へ」は到達点とその方向、つまり「東京の方へ」と広がりを感じさせる違いがあります。助詞の役割を踏まえつつ味わってみると、ますます深い曲。

半世紀経て噛み締めるフォークソング昔はひたすら口ずさんでた

附　録（二十七）

矢　崎　直　人

秋暑しカラクリ人形踊りだす

暦の上では秋ですが、厳しい暑さが続きます。駅前のロータリーにバスから降りた人も日射しと暑さを逃れようと足早に駅の中に消えてゆきます。そんな中ふと雅楽の音色がきこえてきます。その音楽に合わせて駅前のカラクリ時計の人形たちが踊りだします。笛を吹く着物の女性の日本人形の動きと音色にしばし涼を感じるひとときです。

秋暑き夕方六時駅前のカラクリ時計の人形踊る

新紙幣財布に来たり秋立つ日

新紙幣が発行されてニュースになりました。お金をくずしたら新千円札がお釣りに入っていました。北里柴三郎が新しい顔です。ホログラムや円の中に描かれた顔はあまり馴染みがなく不思議な感じがします。しばらく使わないで持っていようという気になりました。

新紙幣財布の中に舞い込めばしばし留めてみたくなりけり

秋暑し尾を垂れしまま走る猫

茶色い猫が目の前を走って行きました。その猫の尻尾が垂れ下がっていました。猫が走る時は、尾が垂れているものなのかもしれませんが、その尻尾に残暑の暑さの厳しさを感じた自分の気持ちを詠み込んでみました。

尾を垂れしそのまま道を走る猫その猫の尾に暑さを感じ

いつまでも続くつくつくぼうしかな

つくつくぼうしの鳴き声がいつまで続くのを詠んでみました。

鳴き出せばいつまで続く鳴き続くつくつくぼうしつくつくぼうし

『秋の気配』

中屋保之

例年（と言ってもこの数年には当てはまらないが）、旧盆が過ぎるころには東京でも秋の気配が漂い始めたものである。緑の樹木がめっきり減ってしまった我が家周辺では昨今、セミの声を聴くことがない。

真夏に、暑さを助長するかのような〝ミーン・ミンミン〟〝ジジジジ～〟というミンミン蟬やアブラ蟬の大合唱が、やがて夏の終わりを告げる頃に〝ツクツクホーシ〟に変わり、そして涼風が頬に心地よい夕刻になる頃、蜩＝ひぐらし＝という、なんとも趣のある名の蟬が〝カナカナカナカナ〟と啼き始める、筈なのだが・・・「不要不急の外出は控えましょう！」と連呼されれば、命惜しさに散歩にも出ずエアコンの効いた部屋でパリ・オリンピックに一喜一憂するしかない。

二十四節気でいうところの七月節（立秋）を過ぎ、処暑（八月二十三日頃）から白露（九月八日頃）、そして秋分へと向かう時期となり、虫たちの鳴き声も「蟬（せみ）」から「蟋蟀（こおろぎ）」へと移る。

漢詩の世界では、「蟬」は高潔な存在とされ、特に秋の蟬は何も食べずに清らかな露をすすって鳴くものとして崇められたそうである。

土佐勤王党の領袖であった瑞山・武市半平太は、獄中でその身を「蟬」に擬（なぞら）えて詩を残している。

初聞蟬

炎威赫赫日流金
獄裏蒸炊又那禁
時羨新蟬尤肆意
窗前緑樹吸風吟

初めて蟬を聞く

炎威　赫赫として　日々金を流す
獄裏の蒸炊　又た那ぞ禁へん
時に羨む　新蟬の尤も意を肆にし
窓前の緑樹に風を吸ひて吟ずるを

この詩の蟬は元気な夏の蟬であろう。〝我が世の春〟とばかりに声を張って鳴いている蟬はまるでかつての武市本人のようで、秋の蟬のような寂寞感はない。が、今、すべてを失って投獄されている武市はまさに秋の蟬であったろう。その気高さを自身に重ね、どんな逆境にも清らかさを失わない存在でありたいと願ったのではあるまいか。高潔な存在とされた「蟬」に自らの正当性と潔白を訴えた詩と伝わる。文久三（一八六三）年九月に投獄された翌年の夏の詩だそうである。

慶応元（一八六五）年閏五月十一日、「主君に対する不敬行為」により、切腹した半平太の辞世。

ふたゝびと　返らぬ歳を　はかなくも　今は惜しまぬ　身となりにけり

秋の蟬の声には、そこはかとない哀愁がある。

『酔いの徒然』（一四九）

丸山酔宵子

『ラフカディオ・ハーンと八雲』

東横線自由が丘の隣、都立大学が最寄りの駅で、駒沢オリンピック公園近くの八雲に住んで三〇数年になる。

ご当地の氷川神社の前には、東急都立大駅に向かって、歯の折れたようにシャッターが閉まった、やや疲れた小さな商店街が続いている。

酒屋、靴屋、八百屋、肉屋、自転車屋、古本屋などの商店親父達は、古希を過ぎてもまだ現役、夕方になると店を女房に任せて、駅前の立ち飲み居酒屋で縁台に座って、チビチビ呑みはじめている。

縁台や合歓の花咲く遊歩道

酔宵子

そんな中に、背広やズボンの直しをいつも頼んでいる宮野鼻さんという広島出身のご隠居風情の呑兵衛がいる。昔は田中角栄とか三船敏郎など有名人の背広を仕立ててていたそうで、銀座、赤坂でブリブリ鳴らしたそうだが、今では地元八雲の郷土歴史研究に情熱を注いでいる。

そこで、歴史巨匠の宮野鼻さんにあえて訪ねたのである。

「来秋からのＮＨＫ連続テレビ小説はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の妻小泉セツをモデルとした「ばけばけ」とのことだが「八雲」って言う地名ですけど、あの小泉八雲と何らかの関係があるんですかね・・・」と、ご隠居宮野鼻さんに敢えて尋ねたのである。

小泉八雲といえば、「怪談」「雪女」「耳なし芳一」で有名なギリシャ生まれの作家ラフカディオ・ハーン。アイルランドで育ち、アメリカに渡って記者として新聞社に勤めるが、当時ご法度であった黒人女性と結婚したため白眼視され、放浪の果てに傷心の思いで来日。

１８９６年、松江に英語教師として赴任し、松江藩士の次女小泉セツと出会い、当時では珍しかった国際結婚をしたのである。

小泉は妻セツの姓。

では・・・、何故彼の日本名を八雲としたのか。それ

は、住んでいた松江の旧国名（令制国）である出雲国にかかる枕詞「八雲立つ」からきているようだ。

八雲は、出雲の須左之男尊（スサノオノミコト）がお后である八重垣姫（ヤエガキヒメ）に送った古歌

「八雲立つ出雲八重垣妻こめに、
八重垣つくるその八重垣を」

の「八雲」に由来する。

ところで、氷川神社は、同じく須左之男尊を祭神とし、由緒も出雲大社から勧請されている故、ご当地目黒の八雲の町名になったのだ。

「成る程。流石！郷土歴史研究家・・。ということは、ここ八雲は小泉八雲とは全く関係無い訳だ・・。」

「いやいや、そうでもないんですぞ・」と、いよいよ壷に入ってきたという得意満面の風情で、お猪口の酒をグイーと飲み干し、「なー君、あそこの氷川神社の横に八雲学園があるだろ。あれは大正時代からある歴史ある名門女子校だが、そこに昭和十六年から十八年まで、小泉八雲とセツの長男一雄が、英語教師として赴任していたのだそうだ。」

杯重ね得意絶頂熱帯夜
酔宵子

「ところで、宮野鼻という名前は大変珍しいんですが・・・。」

「ああこの名ね、よく聞いてくれました。実に、日本に五〇軒しかなくて、そのルーツは広島のようです。」

「へーっ。宮野鼻さん、驚きました。じゃー一杯どうぞグイーっと・・・」

【閑話休題】

尚、「八雲」という地名は、ご当地のほかに北海道二海郡八雲町にあり、その名の由来は、八雲地域を開拓した旧尾張藩主・徳川慶勝公が、豊かで平和な理想郷建設を願って、須佐之男命（すさのおのみこと）が歌った同じ古歌、

「八雲立つ出雲八重垣妻こみに
八重垣つくるその八重垣を」

に因んだのである。

エイジレスアイランド

高橋育郎

南の空の下　大海原にぽっかり浮かんだ　常夏の島
おお　少年の日に憧れた
胸おどる島
しあわせあふれる　エイジレスアイランド

みんなで行こうよ　手を組んで行こう
帆柱高く　いい風うけて
おお　目指せあの島　波を越えて
夢がふくらむ
自由な天地　エイジレスアイランド

ほほえみの花を　交わして歌え
椰子の木陰で　輪になって踊れ
おお　沖に鯨が　潮を吹上げ
元気な島よ
われらは集う　エイジレスアイランド

きょうの日さようなら　あしたがくるよ
夕日が沈み　満天の星
おお　宇宙のドラマ　鳴りわたる
希望の島よ
かおれ青春　エイジレスアイランド

絹の話（166）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹と「おもてなし」

おもてなしを受けると気持ちが良くなるのは、どの様な事が複雑に絡み合って、脳に伝わっているのでしょうか。

絹とマイナスイオン

森林浴をしたり滝の近くに行くと気持ちが良いと言われます。それはどうしてでしょうか。

20世紀初頭まで、その謎はマイナスイオンではないかと議論されて来ましたが、20世紀後半になり、マイナスイオンとは放射線が空気中に放出され、空気の電離が起き、マイナスに電気を帯びた帯電微粒子である事が解明され、その総称をマイナスイオンという様になりました。

京都の鴨川の畔の料理屋さんの外に張り出した桟敷や、郊外の滝の前の涼台で食事すると料理が格別美味しく感じられるのは、ふんだんに湧き上がるマイナスイオン（通常市街地では10～20個／㎤が瀑布付近では10、000個以上）を空気と一緒に吸い込んで、血行が促進され、幸せホルモン（βエンドルフィン）が分泌され、壮快感が誘発されて料理がより美味しく感じられるのです。

同じ様に山や海の別荘、キャンプ場で食べる食事が格別うまいのもマイナスイオンに依るところが多いからでしょう。店の前に打ち水をするのも、夕立の後の爽やかさもマオナスイオンの為せる技でしょう。

古代中国で薬草を試し天地創造の五行説を唱えて深山幽谷で霞を食べ、700年も生きた仙人の長寿の秘密はマイナスイオンであったに相違いありません。

マイナスイオンは活性酸素（過剰になると老化を促進）を中和し、コラーゲンの減少も抑制して不老的役割を果たしている事がわかってきました。

昔から人々は狭い所でも壮快さを少しでも取り入れようと客間などに絹の壁、襖、絹貼りのうちわや扇子などで爽やかな空気で「おもてなし」をしていました。

知られているマイナスイオンの効果

＊ リラクゼイシン効果…精神安定（自律神経活性）
＊ 疲労回復……新陳代謝の活性化
＊ 自然治癒力向上……免疫力向上
＊ 老化抑制（活性酸素の中和）
＊ 幸せホルモンの分泌促進（愛情ホルモンのオキシ

トシン、能動ホルモンのセロトニン）

＊ 幸せホルモンβ エンドルフィンの分泌…高揚感

達成感

絹から幸せホルモンが分泌されるメカニズム

自然界で５００種類以上あると言われているアミノ酸のうち、人間の体も蚕の絹も同じ20種類のアミノ酸で構成されています。したがって絹は他の繊維に比べて大変親和性に富んでいるのです。

人は柔らかい絹に触れると、その柔らかさを体内で作られる神経伝達物質のグリシン（アミノ酸）が脳に伝え、脳は柔らかさに応じた愛情幸せホルモンを分泌し、同様にアラニンは積極幸せホルモンを分泌していると思われます。

この様に反応する絹（家蚕）はそれを構成するアミノ酸の40％強が幸せホルモン由来のグリシンで、30弱がアラニンであるからと思われます。

しかし、絹の壁やカーテンの部屋では絹に触れなくても、なんとなく寒さも暑さも和らげて気持が良いのは何故だろうか。この問題に答えた人はいません。

絹は通常の状態では蛹を守る為に空気中の水分を絹糸の軟結晶の部分（糸の60％）（ヤママユガ科の野蚕では多孔質の部分）の空間に取り込み保湿放湿を繰り返しています。同時に保温放温も同時に行っています。

人がその空気を呼吸すると、各種幸せホルモンが分泌されるのではないかと思われます。

絹の機能性の問題点

絹の機能性の確たるエビデンスはありません。

繭の種類、部分、糸の作られ方でも機能性に差異が出ます。また気持ち良さ等は人それぞれ感受性の違いがありますので、公的には「絹は気持ちが良い」とは言っても良いが、どうして気持ちが良いのか、販売時などに書いた物を渡したりしない様に求められています。

化学繊維は年間１億トン生産破棄され、環境汚染や健康障害を起こしています。絹の生産量は世界中でたった20万トンですが、絹の機能性とその利活用を官学で確たる研究をして、環境健康維持素材として今日の社会に再登場させる必要を感じます。

近い将来化学繊維はタバコと同様、品質表示に「健康と環境を阻害する」という表示を付ける事が義務付けられ、いずれは環境汚染を起こす繊維として生産禁止になる日も来るかも知れません。産業革命以後私達がして来た事を検証し、環境健康に照らして、便利な物でも取捨選択しなければならない時代がやって来るでしょう。

「江上浩二の独り言」81

江　上　浩　二

卸しと問屋からユーザ主導のインテリジェント化

こんな日本的商いのちょっと古めかしいキーワードにしても、物やサービスを提供したいというシーズ型ビジネスと特定な物やサービスが欲しいというニーズ市場型ビジネスが想定される。メーカ（生産者）とエンドユーザ（時には消費者）を物流的に結び付けるのが、この日本的卸しと問屋の単純な役割として考えていいのだろうか。時には、実際は多くのケースで生産者や消費者は非常に弱い立場にある。

仲買人の言い値で生産者は安い値段で物を売り渡さざるを得ない時、消費者も問屋や小売店から言い値の高値で買わざるを得ない時もある。物流的には、卸しは規格商品をメーカから大量に仕入れて、それを小分けにして小売店、そして消費者（エンドユーザ）へ供給するという役目も果たしている。

現代のe-commerce（ＥＣ：通販業者）も商材を仕入れて、ネットでユーザの目を止めさせ、注文を瞬時に受けて、商売成立という事になる。小規模のネット通販では商品の独自企画は出来ないので、所謂メーカ、生産者の企画製品を、ウェブの上手い宣伝文句で、いかにユーザの心を擽る（くすぐる）算段に時間と資金を費やしている（デジタルマーケティング）のが現実の姿と思う。大規模ネット通販業者は、旧来の卸し・問屋の力量を出し、メーカー側に独自企画の製品開発を委託出来るケースもある。上手くいけば独自企画商品という差別化で売上倍増も期待できる。

昨今、ＥＣや物流に関係なく、規模の大きい世界市場を想定し、品質や量産技術の工場で、物が大量に生産され、メーカー間の熾烈な生存競争の果てに、弱小企業が淘汰され、年間生産数が億を越えるような規模でも、メーカーが数社なんている業界もある。こういうケースはもはや卸しや問屋が入り込める世界でなく、メーカ主導型ビジネスとなる。

最近ではファブレスと言って、生産設備を持たない〝メーカー〟がいる。普通はそのような企業をメーカと思っている。物作りでなく、物やシステムの独自設計力があり、生産だけを他社に委託しているのである。実際には世の中に、こういう製品が多い。

最近、日本国内の各地で台湾以外の地で超精密な（2㎚技術）半導体工場の建設ラッシュが続いている台湾のＴＳＭＣは世界一である。米国内にも進出し、昨今の東西対立の中、積極投資を続けているファブレスではない「顧客のメーカー」がある。〝メーカー〟といったが、実は力のある卸し・問屋なのかもしれない。自社の企画製品・半導体チップは絶対市場で売れる、ユーザのニーズを満たしていると自負している。

こんな状況をひっくり返す最近の流れがある。卸しも問屋もいらない。エンドユーザが支配的なケースである。商売とは売買とイコールで有るのだろうか。否、中間の〝メーカー〟や問屋が介在しない世界である。ただし、一つ条件があって、エンドユーザは製品の消費規模（利用数量、台数）が極めて大きいことである。所謂大量購入、消費が出来る力量を備えたケースである。更に必要な製品の独自企画・設計力も備えているケースである。簡単に言うと、エンドユーザが自ら商品設計をして、大量に委託製造業者に発注して、自らがその商品を利用するのである。下記のサイトに、こんな事例があることを示す。

サイト情報：datacenterknowledge.com 2012/05/08/ 号

もう12年も前の事だが、今の地球上の人々の生活で、なくてはならないインターネットのジャイアント企業が建設し始めたＤＣ（データセンター）のコアになる高性能の server（スーパーコンに匹敵する能力、だが莫大な電力を必要とする）が一拠点に数万台も必要とする事に言及した。すなわち、オープン・コンピュートプロジェクトである。

これでお仕舞いと思ったが、よく考えると、受注している製造委託会社は、実は所謂メーカとエンドユーザの中間にいた〝メーカー〟や問屋がそれなりの長い期間で育て上げたものではなかったのかと。即ち卸しと問屋がインテリジェント化した形態ではもはや対抗できない業態に進化したのだろうか。参考にしたサイトの英文資料でも、サプライチェーンを shake up しているとある。これを恐ろしく震え立たせると解釈するか、前向きな意味でも業界の reorganize と考えると面白い。実際、shake up に reorganization という意味もあるようだ。

12年経った現在では CHAT-GPT や人工知能ＡＩというキーワードが多くの人達に知れ渡る状況にはなっているのだが、実はその中身の仕組みまで理解している方は極めて少数である。

初狩便り（34）

花野みぷり

ほたる再生プロジェクト　その２

ホタルのメスは一匹で約八十個の卵を産むという。保冷用発泡スチロール箱を加工して作った「産卵箱」の中に水苔の入ったトレイを入れ、ホタルのメス一匹とオスを五匹入れて交尾させ、水苔に産卵させる。水苔は常に湿っているように、毎日霧を吹いて湿らせる。この仕事は初狩小学校の四年生が担当してくれた。

一方、私たちはホタルの幼虫の餌である巻貝のカワニナを水路に放流する作業を開始。真夏の笹子川に入り、石をひっくり返してカワニナを見つける。始めは難しかったが、慣れるにつれて要領を得、延べで三千匹以上を田んぼの水路やビオトープに放流することができた。

生徒たちが大切に育ててくれたホタルの卵を水路に放流する日が来た。みんな楽しみにしていたのに、熱中症警戒アラートが発表され、あえなく断念。残念無念。

小学校から産卵箱を受け取り、翌朝水路に卵を放流した。ホタルは脱皮を繰り返し、来年四月に上陸し、土にもぐって蛹（さなぎ）となり、六月には羽化する。来年は私たちの田んぼにこれらのホタルが出現すると思う。きっと現われる。

（写真・菅野昌英・朝妻僚子）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2024年7月31日
ゆっくりとした食事

暑い日々と開発により
蝉の鳴き声が減った気がする夏です
蝉の鳴き声は　いつ聞いてもノスタルジックで
夏には欠かせないものですね
暑い日々が続くと食欲が落ちて来ます
それにより　体力低下　免疫低下　口腔内の異常
腹痛　下痢や便秘　吐き気　などが出て来ます
では　無理にでも食べた方が良いのか?
何事も無理は禁物です
食物には　それぞれ
身体にあう　あわない　があります
身体との相性が悪いと食べても不調になることがあります
まして　胃腸が弱っている時期には
それらが顕著に出やすくなるんです
そこで　よく噛む　ということが大切です
小学生みたいですが
食物を良く噛むことで　胃腸の負担も減らし
身体との相性も大きく変わっていきます
さらには　脳にも骨格にも良いんです
咀嚼回数を数えるのも良いですし
一口食べる度に　箸を置くのもいいです
逆に　飲み物で流し込む
映像や本を見ながら食べる　食べて直ぐに横になる
は絶対にやらないでください
引き続き
3S+ゆたぽん+ヨーグルト+八分+湯船　もやりながら
よく噛む　ゆっくりとした食事　を
心がけてみて下さい
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2024年8月2日

夏ですが　感染予防

今の時期　朝の4時半までは
この世のものではない空が見れます
空を見ることが好きで
朝と夕方に空を見上げているのですが
365日　一度として同じ空はなく
毎回違う姿を見せてくれることに感謝です
真夏なのに
様々なウイルスが流行っています
色々ありますが予防法は一緒です
30秒以上の手洗い（2回でもよい）
アルコール消毒（手　ドアノブなど触れる箇所）
緑茶でのうがい（うがい中　声を出すと良い）
帰宅してからの頭髪の洗浄
部屋の換気（エアコンをつけながら5～10分）
商業施設や電車などの人の多い所でのマスク
などなどです
暑くて面倒くさくなりがちですが
感染して発症するともっと面倒で大変です
大切な人や　身体の弱っている人など
周りの人たちに感染させない
思いやり　があるといいですよね
3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分＋湯船
も季節に応じ変化をしていきましょう
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）
玄　翁

「終わりは始まり」

世の中　万物　もの・ごとにゃ
陰陽　終始　様々あれど
どんなものでも永遠に
続くものなど　ありはせぬ
すべてに共通　することは
始まりありて　終わりあり
終わりが　あるときゃ　何かが始まり
もの・ごと　常に循環す

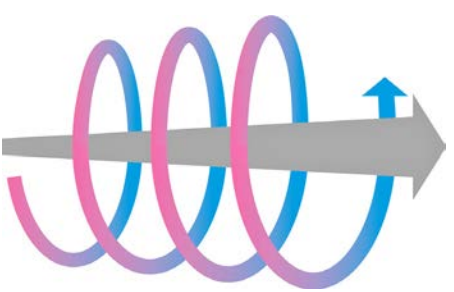
一日終われば　次の日で
夜が更け　明ければ　朝が来る
大晦日がくりゃ　正月来
冬が終われば　春来たる

時代の生み出す　何ごとも
新たに発生　始まりは
一部の動きとなるなれど

次第に全体　動き出し
全てに浸透する頃にゃ
そのものごとは　古くなり
廃れて　忘れて　終わりゆく
その終わりゆく　もの・ごとを
踏まえて　引き継ぎ　その上に
新たな視点や発想が
加わり　次が生まれてく

自分の行動・仕事など
時代の流れに　合わなけりゃ
やめて手放し　終わらせりゃ
自分の内側　広がりて
隙間と時間が　生み出され
ちょっとの余裕を取りもどしゃ
新たな何かが　湧き出て来
それが徐々に膨らんで
新しい次の　動きとなる

新たな時代を生み出す為に
過去を手放し　終わらせりゃ
新たな未来が出現す



「気がめぐりて　血めぐる」

気のめぐりは　呼吸の深さ
呼吸が入れば　気がめぐる
気を動かすには　深い呼吸
常にとまらず　維持されりゃ
血や水など促して
生理代謝が維持される

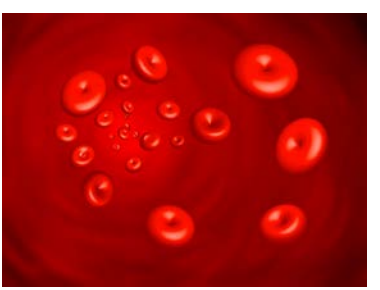
気がめぐりて　血めぐりゃ
血が維持する　組織・器官
養い　充実　満たされて
陽の活動　活発化
元気に生きる　道できる

血は形を養いて
めぐりがよければ　細胞や
五臓六腑が　充実し
血は頭を養いて
めぐりがよければ　脳・精神
感情　おだやか安定す

血は筋を養いて
めぐりがよければ　運動により
元気活発　力出る

座りっぱなしで　目を使い
頭をつかって　動かずに
一日過ごすと　息浅く
場合によっては息止まり
血は停滞　固まって
内臓集まる　腹の中
身体支える　背筋に
ゴリゴリ　形に現れる

気と血両方動かすにゃ
呼吸を深める癖をつけ
適度に歩いて　筋使い
たまには運動　ハアハアすれば
気がめぐりて　血めぐり
身体・頭は充実・安定
動ける元気さ　取り戻す



蝸牛

殿山木風

閑庭雨を喜ぶは　是れ蝸牛
見よ今日の憂いを　忘るるが如し
蔵を揺るがし欣欣として　双角を揮い
新天地に行かんとして　旅魂悠たり

蝸牛

令和六年六月三十日

閑庭喜雨是蝸牛　可見如忘今日憂
揺蔵欣欣揮雙角　行新天地旅魂悠

（語釈） o蝸牛…かたつむり。o閑庭…静かな庭。o蔵…ここでは殻。o双角…左右の角。o新天地…その人にとって新しい天地。これから切り開いて行く世界。

（通釈） 静かな庭に雨を喜んでいるのはかたつむりだ。見てみよ！今日の憂いを忘れているかのようだ。殻を揺るがしながら、満足して二つの角を揮い、行こうとしているのは新天地であるが、その旅の思いは悠悠としているのだ。

※近年の自然現象は手を付けられない程に異常であるようだ。地球温暖化現象と言うが、そんな生ぬるい表現では住まないようだ。難しい表現は止めて、今年は烏賊が取れない。この春は鶯の鳴き声を聞かなかった。雨が降ると大水害を起こしている。どうも日本に限らず世界至る処で大変のようだ。世界では大山火事も発生している。地球規模でおかしいのだ。　梅雨は変則的に来て、雨が降ってもでんでん虫を見ないのに気付いた。昭和六十三年に横浜に落ち着いて雨の季節になるとでんでん虫が這いずっているのにとても懐かしい気持があった。虫はどんな虫でも幼少の時を想い出させる。育ったふる里にも通じ郷愁岳精会ある。

二，三年ほど前に小粒の蝸牛を庭に見つけたが、それが終わりとなっている。話題にすると皆さんもほぼ同じような事を言う。ついでに云うと裏山が削り取られ家が建ち並んで十年ほどになるが、蚊が殆ど居なくなった。雀のさえずりで目を覚ます事も無くなった。

梅雨を迎え、せめて蝸牛が絶滅しない内に詩に残しておこう。

編集室だより【二〇二四年八月】

今泉由利

歌集「地球にて」

親から独立するにあたり、地球の上で〝これ以上は遠くなれない所へ行ってあるのも悪くない〟と思いたち、アルゼンチン、ブェノスアイレスに移り住んでしまったのが、一九六六年。

資産や親族、友人達からゼロになったことも大きなことではあったけれど、言葉がゼロになった衝撃は、とてつもなく大きかった。

スペイン語が、少し少しわかるようになるにつけ〝日本語の大切さ〟私には、隅の方まで理解できる言葉は日本語しかない〟ということを思い知り、そして、この一冊の私の言葉の本に辿り着きました。

一九七七年・一九七八年

ユーカリの花粉散りくる光の中昨日のつづきのことを想える

ポプラの葉の落ち重なりてうらおもてわが手に打ちし白球はどこ

白球は方あやまちて花すぎしハカランダの枝うちおとす

全身に馬の体温を感じつつ散りたるボラーチョの花踏みにじりゆく

ボラーチョの花咲く枝に髪ふれてわが乗る白き馬は全速

泳ぎいしはいつの日ならむ石の中に石と化したる魚は重し

幾万年同じ姿に固くなりて今日よりわがもの石となりし魚

高き高き空ゆく飛行機の中に居て化石の重量がわが膝にある

海を来たりし自動機の始動する花ある枝のユーカリ揺れて

今は暑き祖父母の国へ由野はゆく仔牛の息の白きをいいて

天の川の見えざる国に住みおれば星の話は南十字星の下

合歓木の上より射し来る朝の日は馬上の私の濃き影つくる

冬枯れの枝を透してさし来たる朝日に私と馬の息白し

梅干しの日本が好きだとわが玉由友等と共にスペイン語やかまし
ま白くてほのかに甘き味のするお粥は母の小梅にて啜る

私に吹きくる風のつめたくてプラタナスの木はまだ芽ぶかない

ボラーチョの木をくりぬきて面を作るインディオの主食は玉蜀黍

収穫踊りのインディオは軽きボラーチョの狐の面をつけて踊る

宴終えし昨夜のままのテーブルにケシの花粉の散りたまりおり

曇りくるフロントガラスを拭う時別れということ消したく思う

友のゆくニカラグヮという国知りたくて地理の本地球儀の埃を払う

パナマにて私の前を通りし大トカゲ十年たちてその顔忘れず

世界一の大公園に私ひとり雨に濡れいる木を見たく来て

日の丸と生れしアルゼンチンの旗振りて二つの国に育ちゆく吾が子

学校へゆくのと同じ顔をして今朝ブラジルへ発ちゆく吾が子

三日ばかりサンパウロに遊び来てポルトガル語の歌を歌う子

ポプラの葉五日見ぬまに出揃いて曇り空透くまだ稚くして

こともなく十年住み来し国にして恐るる日あり日本は遠く

一本の木ですら月日の楽しきに埋もるるほどの木の中に住む

春の花を手あたり次第に飾りたて色褪せかかる心まぎらす

日本より一番遠い国に住みもっとも贅沢は日本の真似

祖母に似て流れゆく雲咲き始むる花ただただ眺めているが好きなり

じっくりと肌をみつめる癖つきて空色の瞳の裸婦を描き終う

植木鉢の苺一つに二人の子は半分ずつという語を覚えぬ

国の花セイボと名づく馬に乗る常なる景色が美しく見ゆ

抵抗して落馬させむとこころみし栗毛が今日は私の意のまま

ジーンズの上より羽織りてしばしをり父の選びし扇面文様

風になびく韮は地上八階のベランダにして南十字星見ゆ

曲りつつティパの並木まだつづき乗馬靴にて落花ふみゆく

ニカラグヮの熱き芝生にいたる時鳴かず飛びゆく尾の長き鳥

椰子の実のたわわに実る芝の庭ニカラグヮの子が走る我子が走る

採りたての椰子の果汁のなみなみをひと息に呑む生暖かし

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和六年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利